

## 大器晩成

— 中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から — 文と訳・有為楠 君代

今月のお話は、大器晩成です。

東漢(日本の歴史区分では“後漢”)の終わりごろ、崔琰さいえんと言う人がいました。彼は小さい時から武器を扱うのが好きで、勉強は嫌いでした。二十歳を過ぎてからやっと先生に師事して、『論語』などの勉強を始めました。勉強を始めてからは、一所懸命に努力をして、とうとう文武両道の立派な人になり、曹操の配下で戦いながら、政治的な提案もして、曹操の重臣となりました。

崔琰には崔林と言う弟がいました。崔林は小さい時から何をやっても不器用で、周りの人たちは、皆、彼を馬鹿にしていました。しかし、崔琰は、崔林の様子をじっくりと観察して、崔林には才能があると感じました。有能な人間になるのが、他人より少し遅いだけだと気が付き、崔林を何かと庇ってやりました。崔林は立派な人間となり、後に魏の大臣になり、安陽侯に報じられ、国内を良く治めました。後世の人々は、崔林を大器晩成の人だと言うようになりました。



説明には「大器とは、能力の高い人のこと。重責を担えるようになるには、長い鍛錬が必要なので、そういう人になるのは、比較的小さくなってからだ、という意味」

用例には「一部の俳優さんは、年をとってから才能が開き、素晴らしい俳優になります。これは、大器晩成と言えるでしょう」とあります。

この言葉は、日本でも良く使われますね。身近な人やちょっとした知り合いにも使って、慰めたりお世辞に使ったりしていますね。しかし、この言葉の由来は、もう少し重みのある話のようです。

このお話の主人公、崔琰と言う人を、もう少し詳しく見て行きましょう。

崔琰は、後漢の終わり頃の人で、上の紹介にあるように学問を始めたのは20歳を過ぎてからでしたが、しっかりと身につけ、立派な見識を持ち、人々の敬愛

を受けました。初め袁紹えんしやうに仕えましたが、人民のこと、周囲のことを考えるようにと言う諫めの言葉は、必ずしも重く受け止められませんでした。

袁紹の死後、その子供たちの権力闘争では、双方から招きを受けましたが、どちらにも加担せず、投獄されたこともあり、後に曹操そうそうに仕えることになり、

曹操が遠征した時、留守を任された曹丕そうひの補佐役となりました。この時、狩にうつつを抜かす曹丕を諫めて君子の道を説いています。また、曹操が後継者選びに悩み、臣下に意見を聴いた時、娘が曹植そうしよくに嫁いでいるにもかかわらず、曹丕を後継に推す手紙を開封したまま奏上し、曹操に、公明正大な人物との印象を与えました。

しかし後に、友人が曹操の意向を汲んだ調子のよい上奏文を書いたので、それを批判した手紙が、曹操に誤解され、投獄されたのちに死を命じられました。人々はその死を大いに惜しんだと伝えられています。このことが後に、曹操が悪玉とされる大きな原因の一つになったと、三国志の選者陳寿は認識しています。

立派な人格者である崔琰自身、勉強を始めたのは決して早くはありませんでした。しかし、学問によって磨かれた見識は非常に高く、周りの人たちから馬鹿にされていた弟、崔林の様子をじっくりと見て、この子には才能がある、ただそれが発揮されるのには時間が掛かるだろうと見て取りました。果たして、崔林は魏の文帝、明帝に仕え、魏の大臣を立派に勤めて、最後は安陽亭侯にまでなりました。

崔琰は、他にも何人もの才子を見出し、引き立てています。崔琰に見出された人は、皆人民のために政治を行う立派な政治家であったと言われています。崔琰は、権力におもねらず、正義を貫いた人で、人々の尊敬を得たからこそ、この言葉、大器晩成が、晩成の人崔林ではなく、それを見出した崔琰の故事として伝わっているのでしょう。